

昭和41年3月

秋田県文化財調査報告書第6集



脇本埋没家屋第二次調査概報

秋田県教育委員会

序

昭和40年8月9日から28日までの20日間、昨年に引き継いで男鹿市脇本富小谷地所在の全国的にもめずらしい埋没家屋の第2次緊急発掘調査を実施しましたので、一応の成果をこの報告書にまとめた次第であります。

この第2次調査の目的は、昨年発掘した用水路の西側が部落公民館の建設予定地になり、そのため当該地区を中心に遺構を探索したものであるが、その結果、当該遺跡が平安期のもので、古代民家建築上貴重な資料であることが判明しました。

この報告書は、第2次調査の概要であり、調査の経過をみるとさらに重要な遺構が続いているので、中間的な資料として研究者の参考になれば幸いと存じます。

なお、執筆された東京大学斎藤忠博士、京都大学福山敏男博士、同永井規男、秋田県文化財専門委員赤尾孝太郎、奈良修介の諸氏ならびに発掘作業に協力された飯ノ森部落の各位、多大のご支援をいただいた男鹿市教育委員会関係者、発掘調査関係者御一同に深く感謝の意を表します。

昭和41年3月30日

秋田県教育庁社会教育課長

石川哲三

協本埋没家屋第二次調査概報目次

序	石川 啓三
1. 発掘調査に至る経過	奈良修介…1
2. はじめに	斎藤 忠…2
3. 発掘調査	4
4. 飯森・小谷地面地区的地質について	赤尾 孝太郎…10
5. 家屋遺構	福山 敏夫 永井 規夫…14
6. 出土遺物	富樫 泰時…21

挿図目次

第1図	小谷地遺跡附近地形図	(幸野図)	6
第2図	脇本埋没家屋遺跡発掘平面図	(永井図)	8
第3図	断面図	(永井図)	12
第4図	地質写真	(赤尾写真)	13
第5図	小谷地第二区遺跡	(永井図)	15
第6図	断面図	(永井図)	16
第7図	小谷地第三区遺跡	(永井図)	19
第8図	断面図	(永井図)	20
第9図	出土土器	(高橋図)	22
第10図	木器(1)	(高橋図)	24
第11図	木器(2)	(高橋図)	25
第12図	鉄器(1)	(高橋図)	26
第13図	鉄木(2)	(高橋図)	27

図版目次

第1図	脇本第三地区の発掘	29
第2図	I トレンチ調査状況・井戸側	30
第3図	小谷地第二地区家屋遺構・屋根	31
第4図	小谷地第二地区拉張区	32
第5図	漆器、杓出土状態	33

1. 発掘調査に至る経過

1. 藩本埋没家屋第二次調査について

男鹿市藩本字小谷地の水田下における埋没家屋跡の昭和39年度の第一次調査によって、一棟以上の建築遺構、井戸址、多数の出土陶器木器等の発見がなされ、更にに遺跡の周辺に遺跡の発見の可能性が考えられ、又、隣接する公民館敷地予定地の緊急発掘の必要によって、第二次調査が企画された。

第二次調査は、39年度発掘地点（小谷地第一地区）の西側に約 100 平方メートル、（第二地区）、の北方、道路を隔てた第三地区約 252 平方メートル、更に、小谷地第二地区的西 23 米の地点安藤喜市氏宅地内に約 39 平方メートル、（飯森、第一地区）の三地域を設定して実施した。

奈 良 修 介

2. はじめに

昨年、この地域からは一戸分の埋没家屋が発見された。これについては、「臨本埋没家屋第一次調査概報」にくわしいが、今回の調査によって幸いにも、その西の方に、約9メートル離れて、ほぼ同じ方向すなわち大体南北に長く走る一戸分の建物も顕現された。

この建物は、その全貌は明かにされなかったが、棟木はほ×5メートル、梁間は7メートル以上、桁行柱間はほ×2.80メートル間隔で現在二間あり、少くとも三間以上あったものと推せられる。昨年のものとは、同じ状況に埋没されており、同時期のものとみてよく恐らく、平安時代の中期から後期にわたって存積した村落の一部を構成するものであろう。

その他公館敷地予定地にも、建築資材の一部が散在しており、昨年発見された井戸址とともに、付近に、より多くの家の埋没していることも想察されるに至った。

我々は昨年一戸分の家屋を明らかにしたのであったが、臨本の遺跡は、むしろこの頃の古代村落の跡として理解する必要がある。ことに付近の漆の床には、せきか畦畔の遺構かとも思われるような杭の並列している箇所もあり或いは、村落と生産地帯との関係のあったことも、あわせて考える必要のあることも感ぜられるに至った。

思うに秋田県において、埋没家屋が顕現され、世間に紹介された歴史は古い。すでに安永の末から天明年間にかけ、また文化14年（1817）には大館市付近や鷹巣町付近の臨本の小藤田から埋没家屋があらわれ、多くの生活用具なども発見された。後者について、平田篤胤も「皇国度制考」に紹介し、菅江真澄もまたこのいすれについても、多くの図とともにこれを記録した。

秋田県下における過去のこのような事例をたどってみると、臨本における埋没家屋の顕現も必ずしも偶然でないようだ。今後の調査のように慎重な計画のもとに学術的に行われたことにおいては、単に秋田県下のみならず、わが国において最も最初のものということができよう。

今回完全な調査のできなかった一戸分の家屋の全貌の検出や、付近の埋没家屋の顕現などは、今後に残されるものであり、調査がすべて終了した後結論的な見解を述べさせていただきたいが、私は現在、臨本の埋没家屋群の調査の意義について次のように考えている。

- 一、古代家屋の実際が明かにされ、かつ当時の生活の実態が知られる点に意義が大きいこと。
- 二、家屋群として村落の構造を知ることができるとともに、水田遺構との関連性が明かにされる可能性があり、この究明に期待がもたれること。

三、特に、中央の政治的な中心からはなれた僻遠の地にある点に、古代史の上からの意義がみとめられること。しかも出土品に墨書銘の須恵器が比較的多く発見され、他に一種の木簡などの発見もありその歴史的背景について検討をする必要があること。とくに、この地は、文献の上では、「三代実録」にも記されているように、元慶の頃には秋田城下賦地とされていたのであり、これとの歴史的な関係は、古代史上においても問題が多く、あわせて、秋田城の経営と、本村落とが何等かの有機的な関連の考えられることにおいても、研究上の意義が大きいこと。

以上である。これらについては、なお今後の研究にまたなければならない。

なお、この村落が何故埋没したのか、天変地災により、忽然と家屋や家財とともに倒壊し埋没したのか、或いは何等かの事情により、成る時期に村落民がひきあげ、廃屋のまゝ自然にくづれ埋もれたのか、色々と問題もある。これらについてもあわせて研究する必要があろう。

齋　幕　　忠

3. 発掘調査

1. 調査員の構成

1. 発掘調査員

イ 発掘調査顧問	東京大学教授・文学博士	斎藤 忠
ロ 発掘調査員 総括責任者	秋田県文化財専門委員 京都大学教授・工学博士	奈良修介 福山敏男
	京都大学助手	永井規男
	男鹿市船川中学校教諭	磯村朝次郎
	鷹巣農林高校教諭	富樫泰時
ハ 専門調査員 測量	金足農業高校教諭	幸野敏夫
	文書 秋田県文化財専門委員	半田市太郎
	植物 "	加藤君雄
	地質 男鹿市船川第一小学校教諭	水田耕造
	地質 秋田県文化財専門委員	赤尾孝太郎

2. 発掘補助員及び作業員

イ 発掘補助員	秋田大学研究生 秋田大学生	水瀬福男 杉渕角崎
	ほかに、秋田大学学生、ならびに金足農業高校生徒	
ロ	測量 金足農業高校生徒	
ハ	発掘作業員 5名	
ニ 発掘事務局	顧問 県教育委員会教育長 局長 県教育庁社会教育課長	伊藤忠二 石川哲三
	発掘事務 県教育庁社会教育課文化係長	加賀谷辰雄
	〃 県教育庁社会教育課社会教育主事	吉川欣一
	〃	佐々木清
	〃 男鹿市教育委員会社会教育係長	斎藤一郎
	〃 男鹿市臨本支所長	今泉市助
	〃 男鹿市臨本公民館主事	児玉三郎

遺跡

男鹿市脇本の埋没家屋は国鉄脇本駅の北東約900メートル程の地点にある脇本字富永小谷地から現われた。

この附近一帯は数年前、耕地整理が行なわれた豊かな水田地帯を形成している。

遺跡はこの水田地帯を貫いて琴浜村払戸へ至る農道と大倉口大排水路の直交する付近の灌漑用水路中に現われた。現水田面は海拔12.8メートルを測り、東方の八郎潟湖岸までは約3,200メートルを算する。

遺跡の西側は、低位の段丘が南北に連なり、更に段丘の西は標高354.7メートルの寒風山がそびえている。又、遺跡付近に稻荷神社の在る丘陵があり、所謂、飯盛形の頂部をなし、ここ村落の名称、飯森もこれに基づくものと考えられる。

埋没家屋に関連ある建築・構材らしいもの、又は矢板様のものは從来、北よりあげると①琴浜村角間崎、②同村福川大堤（おおつつみ）、③脇本字浦田、④同じく小谷地、⑤同じく飯森、⑥野田、⑦大倉延命寺台（墨書き土器のみ）となっている。以上の木材等の出土範囲はほぼ南北4.5キロメートルに及ぶ。

又、この地域の北北東に当る琴浜村鶴木、南の脇本字飯村、飯町より夫々、平安期の鐵手刀が出土している。

参考文献昭和40年男鹿市埋没家屋調査概報第一集

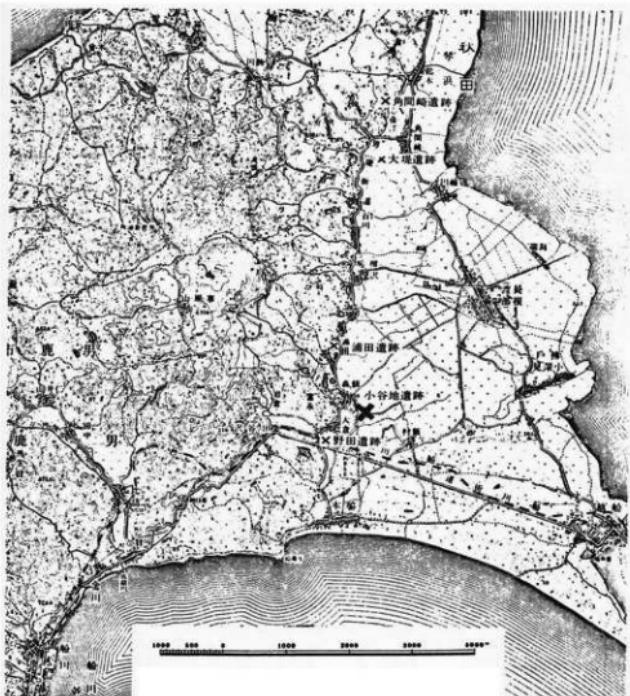
昭和37年磯村朝太郎「男鹿市脇本飯森遺跡について」

（秋田考古学18号）

（奈良修介）

第 1 図

小谷地遺跡附近地形図



X印 木材出土地域

3. 発掘調査概況

昭和40年の緊急調査は、主として公民館建設予定地（小谷地第3地区）の調査を主体とし、その他、昨年調査（小谷地第1地区）した地区的西隣り（第2地区）及び道路の西にある安藤家の宅地内を発掘調査した。

1. 小谷地第2地区

この地域は39年度埋没家屋発見地の西壁以西の地域に当る約100平方メートルの地域を発掘した。一般的層序は、大別すれば、約40cm内外の表土（褐色土）、第2層褐色粘土約24cm、第3層青灰色砂質粘土層（泥炭層、疊層等を含む）となる。

調査地域全体に多くの木材があらわれ、西壁に接して深さ50cmの間に屋根があらわれた。
(屋根遺構の項参照)

2. 小谷地第3地区

発掘調査は、全面積4.3アール中約252平方メートルの地域に予定し、巾2m、長さ18mのトレンチを北よりA～Gまで設定した。層序は第1層褐色土（耕土）、第2層黒土40cm、第3層青灰色粘土層（遺物層）となっている。A～Dのトレンチ西寄りに2m内外の倒木が5・6本方位を異にしてあらわれたが建築遺構は見当らなかった。Eトレンチにおいて、東西に走る長さ8m・巾10～20cmの浅い溝があり、これと交叉する巾1mほどの南北方向の溝も発見した。又最も南側のGトレンチの西端には細い杭の頭を五本発見した。

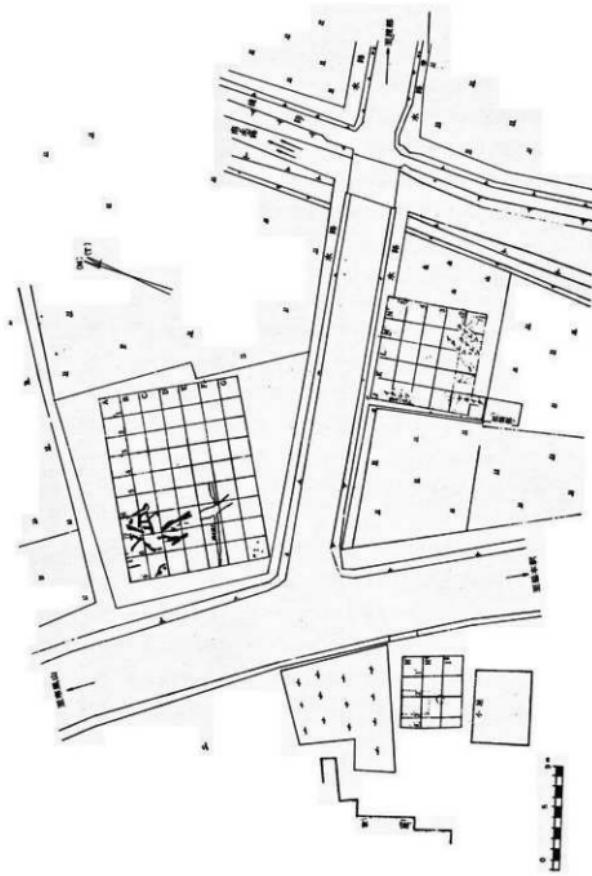
以上のようにこの地区には、家屋は発見されなかつたが、溝の中から多くの串状土器、又木製の桶の残片、須恵器残片も発見され、居住地区的周辺の様相を示していた。

3. 飯森、安藤家宅地

第2地区的西方23mの地点の安藤家の畑に巾2m、長さ3.5mのトレンチ（Iトレンチ）を設定し、次いでこのトレンチを漸次北方に延長し、（Hトレンチ及びHFトレンチ）統べて、（東西6.5m、南北6m）39平方メートルの地域を調査した。この地域は、第二、第三地域の西方に当たり、標高も1m程高い地点なので、前記の地点との層序等の相連点、及び前記の地点が低湿な水田地帯であるのにこの地点は道路を隔てた村落地帯であり、丘陵に近いので、埋没している遺跡も或いは異ったものが予想されるからであった。この地点の一般的層序は1～2層黄褐色表土（二層に細別、2層や、粘質）約60cm3層、暗褐色砂質壤土（灰青色砂層を含む）約30～40cm、4層黒色砂質壤土、約20～40cm（青灰色砂層、黒色風化層を含む）6層、暗褐色粘質土（上部に細かい木片を含む）となる。この地点をIトレンチより発掘を開始したが、IトレンチとHトレンチの境に当る地点、表土下1.2メートル内外に至り、長径64～短径57センチの円い桶型を廻し、竹のたがで結束した井戸に突き

第 2 図

脇本埋没家屋遺跡発掘平面図



当った、この井戸は層序からみて、上層より掘り込んで灰青色砂の壊った所に位置しているので、表上より円形の穴を2メートル以上掘り込んで、井戸を設けた。やゝ時代の降ら漆器片等も出土した。

又、Iトレンチの約1.5~1.8メートル程の深さ（泥炭層）から曲げ物の杓木製馬等の木器があらわれたが、遺構はなかった。

以上によって考察すれば、この飯森第一地区は元来、低温な黒色土地表であったのであろうが、近世に至り村落の形成と共に、西側の丘陵上の褐色土を客土したものと思われる。

従って、この地帯の出土品の木器、漆器の如きは、その形式から見て或いは鎌倉～室町の間にこの地に祭祀されていた神仏に供えられたものかも知れない。

そしてこの地点の出土遺物の年代は小谷地地区の家屋の年代よりも降り、家屋上を覆っていた黒色土層（木簡の年代）に相応すると推測される。

4. 飯森、小谷地両地区の地質について

1. 緒 言

当本地区の埋没家屋発掘作業の継続として、昭和40年度に行われた地域は、小谷地地区2ヶ所と、飯森地区1ヶ所の3ヶ所である。小谷地地区は北部と南部で、北部はA B C D E F G の各トレンチ、南部はJ K L M N の各トレンチ、又飯森地区はH H I の各トレンチで、夫々第1図に示されている通りである。ここに見られる地層は、第2図、第3図、第4図に示されるように、砂、粘土、植物質等を混える現代の堆積層である。

2. 調査概要

第2、3、4図の断面図に示される通り、小谷地、飯森両地区共、地表から約2メートルの深さまで大体表土、褐色層、青色層、黒褐色層、泥炭層の順に存在し、その層厚は30センチから50センチで一定せず入り混っている。これらの他に飯森地区西側には一部ジャリ層が存在する。（第2図Aトレンチ北側断面図）

(イ) 表土、小谷地北部地区は公民館建築予定地として盛土をしたもののが表土になっているが、ここで言う表土は盛土以外の本米の耕土の意味である。褐色の砂質であって、草の根の入り込んだ褐色のすじが多く見られ、径5ミリ位の青色凝灰岩質の小礫や、砂鉄、硫化鉄粒を含むが、植物質は比較的少ない。

(ロ) 褐色層、外観は褐色であるが、内部は青緑色である。褐色は鉄分の酸化による色である。粒は比較的細かいが、径3ミリ程の礫を含む部分もあり植物の根の痕跡も含まれる。

(ハ) 青色層、青色は2価鉄の色であって、空気中で茶褐色に変じ、乾けば灰白色になる。水草の茎と思われる植物質が認められる。(ロ)の褐色層よりも粗粒が多いが、ほぼ同一の成分であって、青色を呈するのは鉄の還元せられた色で、空気中では褐色に変わる。

(ニ) 黒褐色層、全体として黒色が強く、粒が細かく、粘り強い粘土が多い。植物質は比較的少く、木炭片（第4図(1)）を含む。第4図はすべて实物大の写真である。

(ホ) 泥炭層、水分の多い砂、粘土であって、植物質が多く含まれる。植物としては、樹木の茎（第4図(2)）小枝（同(3)）竹又は芦（同(4)）その他被葉樹の葉が多い。

(ヘ) ジャリ層、径1ミリ以上の砂礫が多く、他は茶褐色の粘土である。礫は主として浮石質安山岩の円礫で（第4図(5)）あって、軽いために遠方から運ばれて、波によって湖岸に打寄せられたものである。炭化した植物の茎（第4図(6)）杉の実（同(7)）などが認められた。

以上を一括して表にすると第1表のようである。

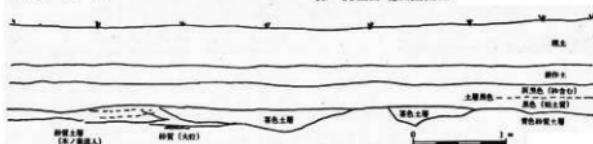
第1表 層別粒度分布

層別	粒度分布%			摘要
	$1/600^{\circ}$ 以下	$1/10 \sim 1/600^{\circ}$	$1/10^{\circ}$ 以上	
表土	15	50	35	
褐色層	40	40	20	
青色層	15	45	40	1ミリ以上の粗粒植物質多し
黒褐色層	15	65	20	
泥炭層		70	30	大部分植物質
ジヤリ層	15	15	70	1ミリ以上の粗粒は全体の50%

第3図 断面図

3の1

A Trench 北側断面図



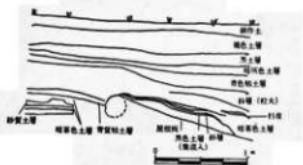
B Trench 北側断面図



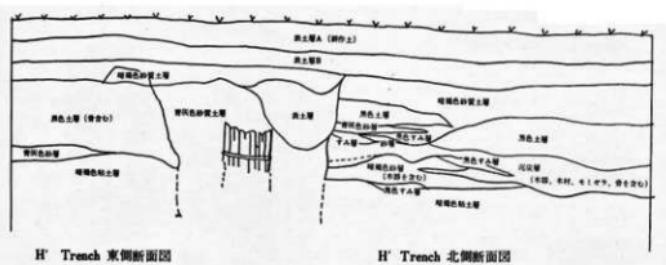
J-M Trench 3区断面図



J Trench 南側断面図



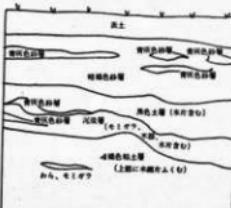
I Trench 北側断面図



H' Trench 東側斷面圖



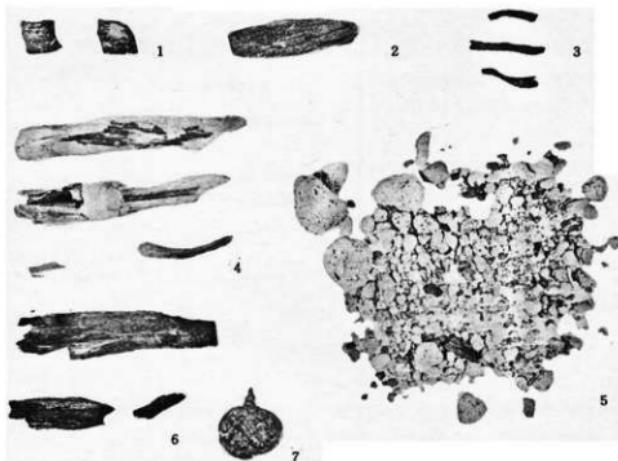
H' Trench 北側断面図



10

第 4 図

地質標本写真



3. 結 言

今回の3カ所のトレーナによって調査したところを一括して考察すると次のようである。

(イ) 飯森、小谷両地区共、地質的に類似の堆積物であつて殆んど差違が認められない。

(ロ) 堆積物は現代（歴史時代）のものである。

(ハ) 青色、褐色、黒褐色など、色の変った層があるが、その層厚は一定せず、層序も入り混っていることから、この地域は、極めて近い歴史時代において、湖岸の進退（土地の隆起、沈降）が、繰り返して行われたものと考えられる。

(ニ) 植物質が多く含まれているが、その植物としては、広葉、針葉、竹又は芦などの各種が存在し、現代の植物と変りがない。又この地域は陸地に極めて近い湖岸であったと思われる。

(ホ) 飯森地区西側が湖岸であった時代は、埋没家屋が実在した当時と時を同じくするものではないか。

以 上

昭和4年3月記

5. 家屋遺構

小谷地2区

遺構は水田下約30~50cm以下のところにある。L・M・Nトレンチの南端に発見された真北線より東へ20~25m振れた方向に走る2列の木杭列と柵列は水田下約30cmから約1~20cmの範囲内に包含されている。それに対し、J・K・Lトレンチで発見された家屋遺構を中心とする遺材群は水田下約50cmから約2mの範囲内に包含されている。こうした包含層のちがい、特に地下常水位の変化によると考えられる残存遺材頂部のレベル差は、ここに時間的な差をもった2種の遺構があるということを考えさせる。すなわち、前者の方が後者より時代が下ると思われる。

L・M・Nトレンチの杭列は約1.5mの間隔で2列に並んでいて、いづれも更に南方に続くらしい。西側の杭列は露れている部分の延長は1.5m程で、杭にも断続があってそれほどはっきりしないが、東側の杭列は延長3m強あり、ほぼ杭1本分ほどの間隔で密に打ち並べられたものである。杭は直径15~20cmの丸木を心を中心に4つ割ないしはそれ以上にこまかく打ち割ったもので先端は尖らせてある。試みに抜きとった杭の長さは90cmであった。なお、西側の杭列に接して、これと関係があると思われる矢板列が1mばかり続いている。

Jトレンチから発見された家屋遺構は、いまだその全容をあらわしていないが、昨年小谷地1区で発掘した家屋遺構より規模の大きなものであることは確かられた。遺構はほぼ南北に近い方位性を示し、柱・棟桁・尾根板・杭その他で構成されている。

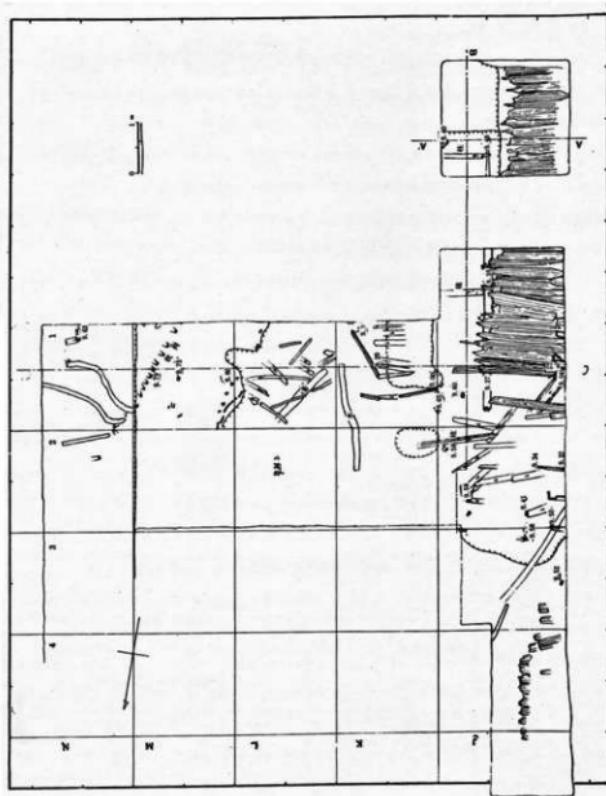
柱は約2.8mの間隔をおいて南北列に3本発見された。約30から70度の角度で西方に傾いている。北側の柱は8~9cm×20cmの長方形断面をもち、長さ2.36mで下端は尖っている。南側の柱は10cm×20cmのはば直角三角形に近い断面をもっている。いづれも頂部は折損したような状態で腐朽していた。中央の柱は、南北の2本の柱と異り、直径約18cmの丸木を半割にしたもので半円形の断面をしている。この柱は頂部を浅くU字形にくぼめ、そこに棟桁を半身程納めている。このような柱と桁との組み合せ方は、小谷地1区でも見られたが、この場合は棟桁材が柱のU字形のくぼみの中に全身納ってなお余裕があった。

棟桁は直径約15cmの丸木で長さは5.6mある。北端は折損したように見え、南端は棟桁が南に向ってやや高くなっているので腐蝕してしまったのであろうため先細りして僅かに南の柱に触れた状態になっている。

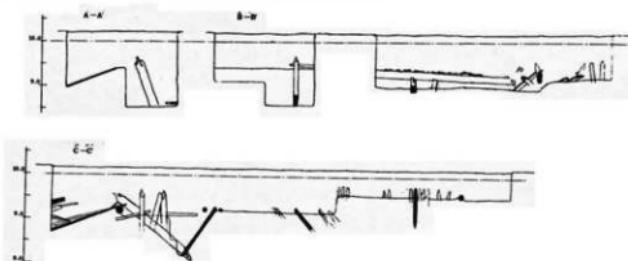
棟桁の上にのって尾根板が棟桁と直角に並べてある。尾根板は棟桁の南端より更に南へ続いており、この家屋遺構が発掘個所よりなお南方に続くことを示している。尾根板は西

第 5 図

小谷地第二区遺跡



第6図 断面図



方には20の勾配で傾斜し、かなり整然と並んでいる。板は巾15~20cm、厚さ2~4cm、長さは長いもので約2.2mある。大部分の下端が尖っているのは小谷地1区の場合と同様であるが、後者が木の外周に沿って木取りをしていたのに対し、前者は心割り法による木取りをしたものである点が注意される。

J 6地点では屋根板の上に、繊維方向を南北にして壹が検出されている。またJ 6区の南壁断面からは、屋根板の傾斜と併行して、板の直上に10cmばかりの強粘性の粘土層が検出されたが、こうした壹、粘土層は家屋遺構と直接の関係をもつものと考えられる。

J トレンチの西壁からは、屋根板から40~50cmほど高いところに、尾根板と同様西方に傾斜する材が6本30~50cm壁面から突き出した状態で露れたが、これらが何であるかは解明できなかった。

K 1地点には東側へ50°~60°の角度で傾斜した杭の列が南北方向に並んでいる。この部分だけ特に深く掘って下端を探ったところ、それは水田下2mのところにあり、下端部20cmばかりは落葉と本片からなる粘土質の泥炭層中にある。これらの杭は直径10cm内外の丸木を芯削りないし三つ割りにしたもので、それをかなり密に並べてある。障害物などは認められなかつたから、この杭列の傾斜は後の自然の傾倒ではなく、当初からこのように構築されたものと考えられる。

北側柱附近には直立する杭や倒壊する部材群がみられるが、これらの中に組織性を見出すことはできない。

またJ トレンチの北側部分には、3m程の長さに板が並んでいるが、どの板も長さ40cmたらずのもので層位的にも家屋遺構とは関係がないと判断される。

なお今回の発掘では、家屋遺構附近からは土器などの遺物が殆んど出土しなかつたが、これは日時の都合で旧地表面までの掘り下げができなかつたためであろう。今回の掘り下

げ面は平均して水田下1mであり、全体の解明には2m近くまで掘り下げる必要があると考えられる。

考　　察

このような家屋遺構の状況から、本来の家屋の形態や構築法を復原することは困難である。ここではそれについての手掛りとなるであろう諸点を指摘するに止めた。

まず家屋規模については、屋根板と柱列によって桁行方向に少くとも3柱間あると考えられる。1柱間は約2.8mと計測されているから、少くとも8.4mの桁行長さがあると考えられる。今回には、一つの柱列しか発見されていないから、他の一边の長さを知ることができず、従って平面規模までは判らない。

柱や棟桁の存在によって、主体構造が軸組構法によっていたことは明らかであるが、仕事そのものは極めて大雑把なものである。

屋根板の中には短くて末端が尖っていないものがあるが、大部分は末端が尖っておりかつ端部のなかびは大体そろっている。このことは小谷地1区の場合も同様なことがいえた。こうしたことから屋根板の末端を尖らせるのは構法上の目的からなされたと考えられる可能性が強くなった。

このように尖らせる理由として考えられることは、屋根板の末端を場中につきさすためにではないかということである。もしそうであれば天地根元造に類するもの、或は片流れ屋根の家といった形態を想定することもできる。しかし、現場における他の状況は、必ずしもこうした想定に合致するとは限らないので、あくまでも一つの想定という域を出ない。

屋根板についてはもう一つの問題がある。それはどのような方法で屋根板を固定したかという疑問である。というのは、屋根板を固定したような釘穴その他の仕口が何ら認められなかったからである。この疑問に対する手掛りとしては、J6地点の南壁から検出された強粘性の粘土層と、蓋の存在、など前記の屋根板末端の尖りがある。すなわち、屋根板の一端を地中にさして固定しながら棟桁の上に並べて行き、その上に粘土をおいて板同士の振れを防ぎ、併せて防水、防寒の役に立てたのではないだろうか。この場合、蓋は粘土がはがれたりするのを防ぐ、いわゆるさきの用をしていたのではないかと考えられる。もっとも、これも今迄に知られた事實をもとに組み立てた想定にすぎず、将来また別種の新しい事が現れれば考え方ねばならなくなるだろう。

K1地点の当初から傾斜してえられていたと考えられる杭列は、家屋の形態、構築法を知る上の重要な資料になるのでないかと予想されるが、未発掘に近い状態なので今後の解明を期待したい。

小谷地 3 区

A～D トレンチには自然状態に樹木の破片が散乱するだけで、構築用材と考えられるものはなかったので、E～G トレンチにおいて注目された状況について述べる。

この地区的旧地表面と考えられるものは、地表下（盛土以前の）約40mmのところにある青灰色砂質粘土層である。この層と上層黒色土との境界からは土器・木器の破片、および金属器が検出されている。

E・F・G トレンチの遺跡は、一条の小溝と杭列および窪地からできている。

小溝は旧地表から約20cm掘り下げた巾約30cm位のもので、東北から西南の方向には直ぐに走っている。一端はE 6 地点で終るが、他端はE トレンチの西南壁よりさらに向うに延びている。その断面はかなり整った台形であり、明らかに人為的なものである。

杭列はE～G トレンチの西南端部には南北の方向に2列になって並んでいる。この杭列は前記の小溝の南側だけにあり、北側からは全く検出されなかった。これらの木杭は、直径10cm前後の丸木を割り裂いたもので、旧地表下約40mmの深さに打ち込まれている。この杭列の他に、E 6 及びG 6 地点から1本づつ木杭が見つかっている。

F 6 ないしF 7 地点には、旧地表面より25cmほど深くなかった直径およそ2mくらいの円形の窪地がある。この上には灰色がかった粘土が堆積していて、その中には木の破片、土器破片、および小石などが散乱し、窪地の北側には深さ60cmくらいの小ピットがあった。木の破片の中には加工された小穴のある材の断片などがあり、この部分もかって人間の用に供せられたものと推定される。

その他、注目すべきことは、F 9 地点から旧地表上に、小さな鉄釘と長さ21cmのへら形の鉄器があったことである。

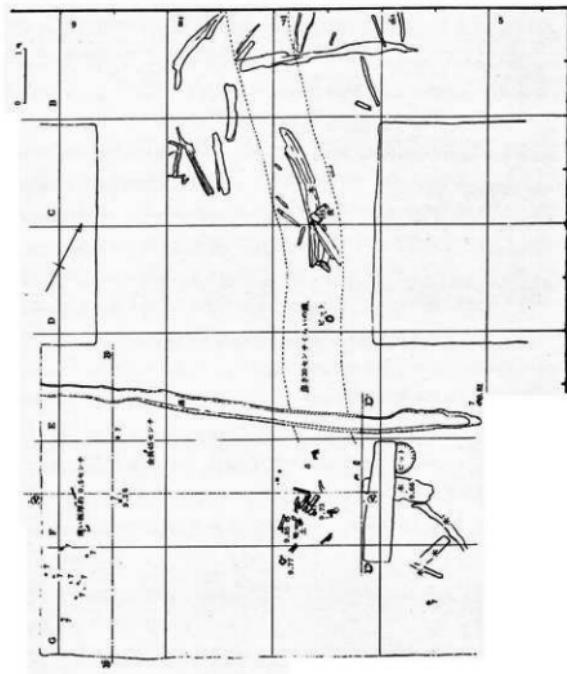
考 察

上記のような状況は、この部分が直接に建築跡であるという何の徵候も示していない。しかし、これらの溝・杭・列・窪地の存在はこの部分が集落地または宅地の中に含まれる所であるという想定を説くさせる。とりわけ杭列が小溝の北側には続いていないという事実は、溝の性質を考え併せる上にも注目をひくことである。

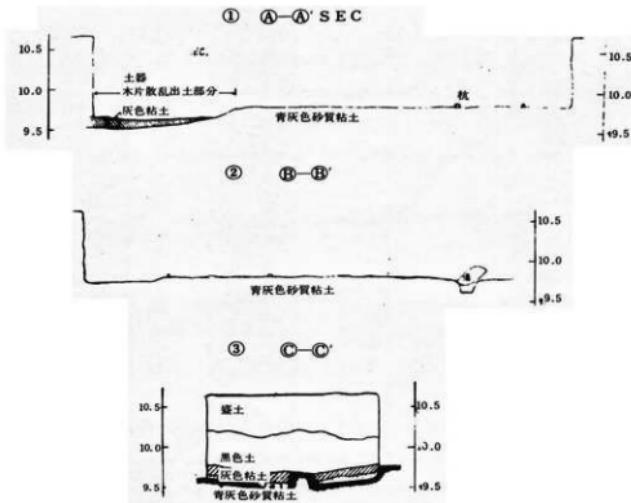
この溝の機能についてであるが、これを水路とするには疑問がある。というのは、この溝が掘られている地面はごく緩やかに東北方向に下り勾配となっているが、溝自体は東北側で留っており、從って水が掛けないからである。それでは、この溝は何の機能をもっていたのかというと、恐らく土地の境界線を示すためのものでないかと推定される。そして杭列は、境界の内側の土地につくられた何かの施設の跡を示すものではないだろうか。

この想定にたてば、杭列が溝の北側にないのは、北側は外側の土地であるからだという

小谷地第三区遺跡
第 7 図



第 8 図 断面図



ことになる。そしてまた、内側の土地にある窓地の存在や、釘やへら様の鉄具の散布にも、
ここでの生活を考える上で多くの意味をもってくると思われる。

(以上)

福山敏男

水井規男

6. 出 土 遺 物

第二次発掘調査は小谷地第2地区（第一次発掘調査地点の西側）、小谷地第3地区（公民館建設用地）、飯森安藤家宅地と三地区で発掘調査が行われた。小谷地第2地区からは家屋造構が発見されたが、内部まで発掘することができなかつたため遺物は少ない。小谷地第三地区からは家屋造構は発見されず、遺物が発見しなにすぎない。飯森安藤家宅地からは木器、その他が発見されたがその時期については今後の研究を待たねばならない。

小谷地第2、3地区

土器、土師器、須恵器、墨書き土器。

弥生式土器（1）

1. この土器は当地方の弥生式土器の仲間に入るるものである。口唇部に縦文があり、頸部には竪状工具あるいははけで調整された無文帯がある。それ以下胴部には斜縦文が施されている。器形は菱形をなす土器であろう。

土師器（2—5、13）

2—5、13が土師器の仲間と考えられる。2、3には横目文が施されている。4は竪状工具で調整されて無文である。2—4の土器の底部は木葉底である。5は菱形土器の口縁部の破片である。内外両面に横帯に横目文が施されている。外面は胴部に横目文が施され内面は口縁部と頸部のみ張られている。その他口縁破片で13のように強く外反したものもある。これは菱形土器であろう。

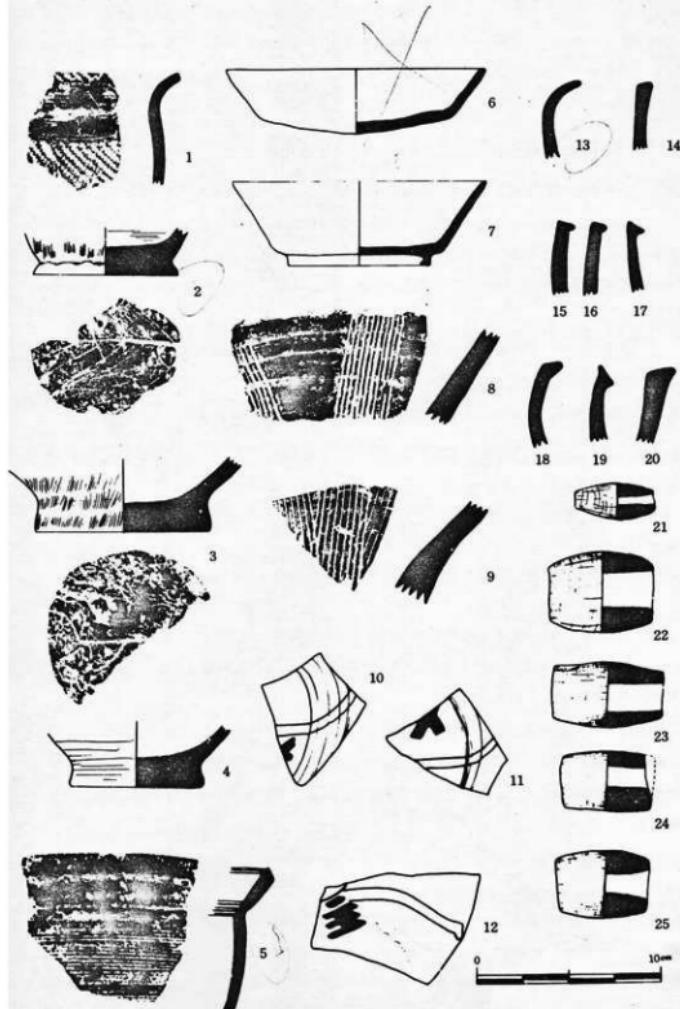
須恵器（6—12、14—20）

6、7は壺、及び古付土器であるがいずれも完形品ではない。図上復原したものである。色調はねずみ色をなし、焼成良好。8、9は内面に図のように横目文のある須恵器である。器壁は厚い。その他に口縁部破片が多く発見されている。14—20までがそれである。いずれも菱形土器の口縁部のようである。15、16、17、19のように外側に厚くなっているものが多い。18のように口唇部が尖っているものもある。これはゆるやかに外反した口縁をもち20は直上に近い状態をなすようである。

墨書き土器（10—12）

墨書き土器は第一次調査に比して非常に少なく四点発見されたにすぎない。10、11は底部に墨書きがあり、墨書きの部分が破損して判読しかねるが「×」かもしれない。12は蓋に墨書きのあるもので文字は「主」である。その他破片ではっきりしない墨書きが一点ある。

第 9 図 出 土 土 器



土製品（21—25）

土製品は全て土鍊である。器形はほぼ円筒形をなし、大きい孔があけられている。21のように小形のものと22や23のように中形のものと2種類発見されている。地理的な条件から考えて漁網の鍊と考えられる。

木 器（1—23）

1～3、2の木器は曲物あるいは器の底部と考えられる。1は真中に孔があけられている。この孔は焼いた道具であけられたらしく、孔の周りが焼けている。又図の点のある所にも焼あとがある。孔のあること等から考えて曲物等の底部ではないかもしれないがここでは上記のように扱った。3は半分だけ残っている。この木器は端に行くにしたがって断面がうすくなっている。

4、この木器は完形品である。図の上端左側に孔があったような跡があるがはっきりしない。右側下半部だけが斜に階段状に削られている。

5、この木器は完形品である。上半分の断面はほぼ長方形をなしているが、下半の細くなった部分に来ると円形となっている。何かの栓のようにも考えられるが、それらしい使用痕も見あたらない。

6、この木器は先端部だけで、その全体を知ることができない。先端部の断面は円形をなし、その下でくびれてまた太くなるようである。

7、先端部が尖があり、図の右側を三角形に切りこんだ木器である。断面は三角形をなす。破片であるためこの歯状のものがいくつあるのか不明である。織機の一部かと考えている。

8、9、串状木器である。第二次発掘調査に於いても20本近く発見されている。

10、この木器は完形品である。7を小さく、そして細長くしたような木器である。三角形の切り込みが二ヶ所ある。断面三角形。

11、長方形の断面をなす木器で図の上端に鋸い工具によって削られている。

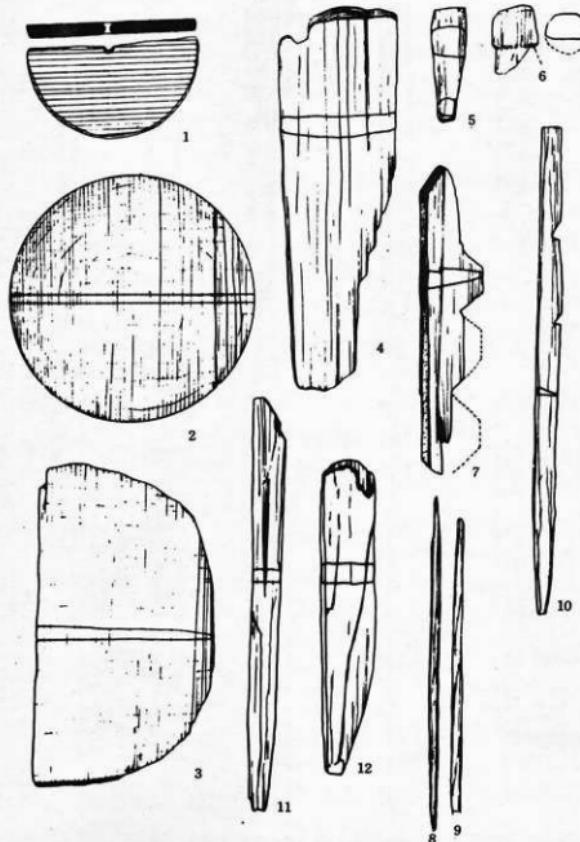
12、これも11と似た断面をなす。巾が広く図の右側下部に加工がある。

13、略正方形の断面をなし上部で太くなっている。正面上面から中央部の右側面に削痕が認められる。

14、うすい板を用いて、上部両側縁に三角形の切り込みがある。木筒の一端かとも考えられる。

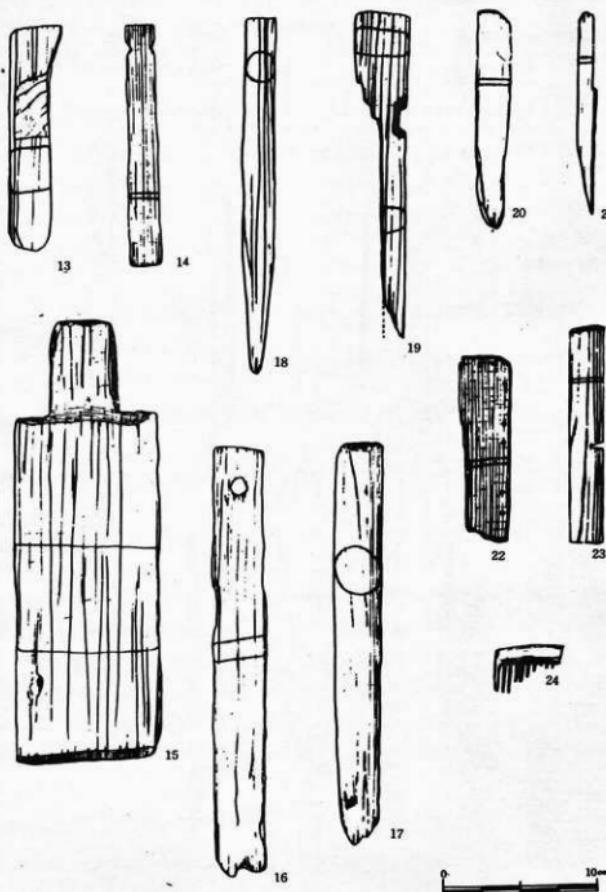
15、四角柱を切り、上端を長方形に細く削ったもので、所謂柄の仲間である。

第 10 図 木 器 (1)



0 10mm

第 11 図 木 器 (2)



16、断面長方形をなし、上端に孔がある。下端にも孔のあった跡があり、完形品はもつと長いものである。 ろう。

17、18、棒状木器で断面は円形をなす。表面はきれいに整形されている。17も18のよう先端で尖るものと思われる。

19、上端は比較的巾の広い木器であるが、上部左側が階段状に削られて図のような形をなし、また右側には長方形のくりこみがある。下部の断面は台形をなす。

20、うすい板を用いて作られた木器である。右下端に鋭い工具で削られた痕が残っている。

21、この木器も20箇に近い。ただし右側中部に上端から削られたことによって肩がつくられている。

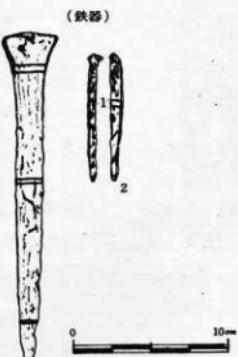
22、この木器は底部であろう。形は隅円方形をなすものと思われる。この木器の端に近い部分に二つ一組になって木釘が打込まれている。

23、うすい板を用い、図のように略三角形の取りこみのある木器である。

24、木製櫛である。破片竹で全体の大きさは明らかでないが横に長い櫛である。歯と歯の間は3mmある。

第 12 図 鉄 器 (1)

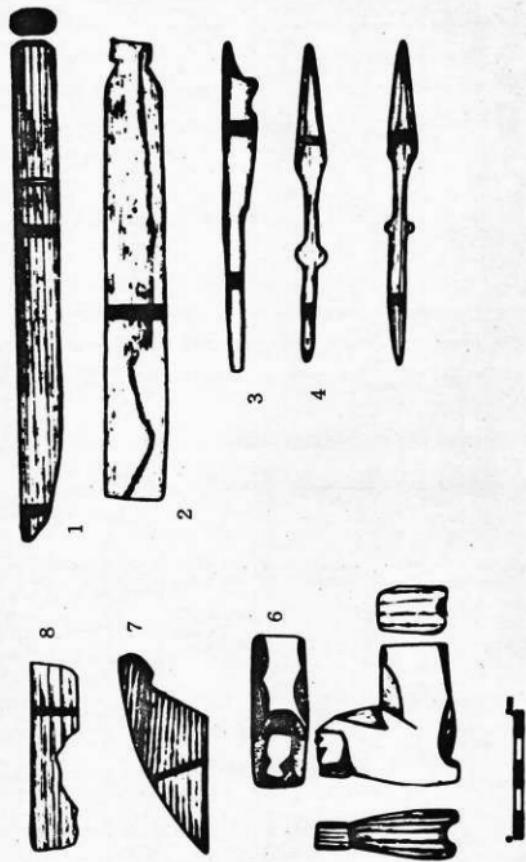
鉄 器



1、へら 上端が広くなり、かなり打たれた痕が残っている。

2、釘。断面長方形で上端が広くなっている。鉄板を四角にまいた釘ではない。

第 13 図 鉄 器 (2)



飯森地区木器

1、木製刀子である。表面はきれいに整形されている。柄の断面は隅円の長方形をなして上端より5cm程下ったところから図のように断面長方形をなす刀身となっている。

長さ19.5cm

2、板を用いて上端両側に削り込みがある。木簡の様に見えるが文字はない。長さ18cm。

3、上端の特異な形の木器である。長さ13cm。

4、先端が鉄のような形をした木器である。鉄錐の模造品とも考えられる。長さ12.7cm

5、4、とはほぼ同形態である。長さ12.7cm

6、木製の馬である。高さ5.5cm、長さ5.5cmを計る。後部は少し欠けている。

7、木器の破片である。板を用いたもので、図右端につまみがある。下端は焼けていて不明。右側は弧状をなす。

8、うす板を使用し、図のように下端に不整形な切り込みの加工がある。

以上飯森地区から出土した遺物の代表的なものを紹介したが、この他に図版5図のようにも出土している。これらの遺物は祭祀関係の遺物とも考えられ今後の研究のようするところである。又この地区から出土した遺物が家屋遺構と直接結びつくものか否かは今のところはっきりしない。

漆器

漆器もこの地区から数点出土している。図版5図に示したものはその一つである。

黒うるし（漆）に朱漆で山岳文が描かれている。内面は朱が塗られている。少し厚っぽく、秀衡塗の系統のものと思われる。図柄からみて鎌倉時代頃のものと推測される。生地に布をおき漆している。厚さは上部で3mm、下部で5mmである。

あとがき

昭和34年4月、小谷地一帯の耕地整理のさい発見された遺構が、昭和39年度第1次、昭和40年度第2次と発掘調査により遺跡の性格が明らかになりつつある。発掘調査には、小谷地の部落関係者が積極的に協力を示され、真夏の炎天下順調に行なわれた。

平安期の民家遺構ではほぼ完全な形態で表われたのは例が少ないと学界の注目的となっているが、今後もこの遺跡一帯の性格の究明をつけたいものである。幸いに文化財保護委員会が緊急性を認められ発掘調査に多大のご援助を賜わり、また、地元男鹿市においても市内に所在する貴重な遺跡として、その解明にのりだしておられるので、遺跡の全貌が広く理解されるのも間近いことと思われる。

昭和41年3月

(文化係)

図 版 I



1. 脇本第3地区の発掘（南より望む）



2. 小谷地第3地区発掘状態

図版 II



I トレンチ調査状況

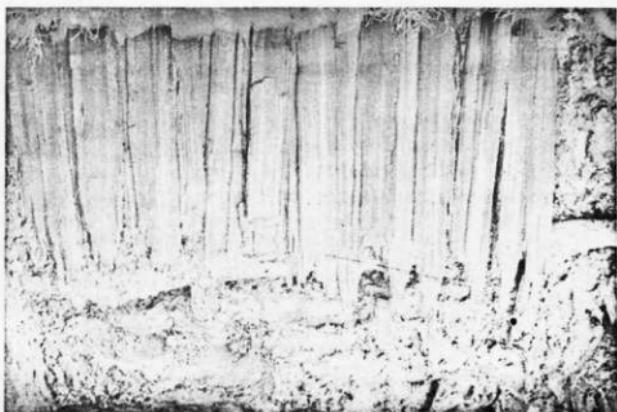


I トレンチの井戸側

図 版 III

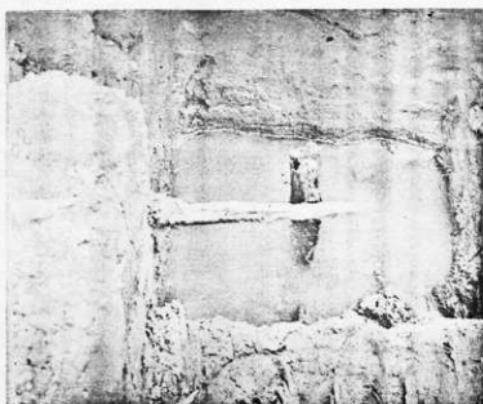
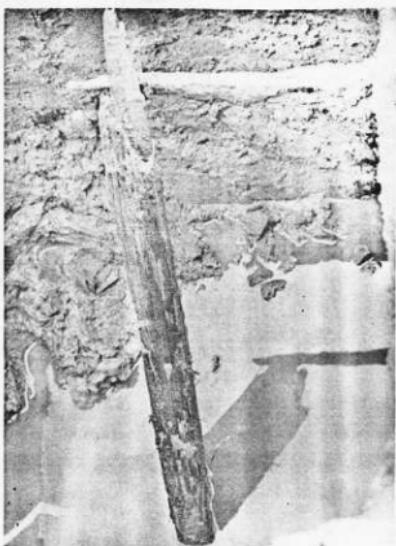


1. 小谷地第2地区家屋遺構



2. 小谷地第2地区家屋遺構屋根

図版 IV

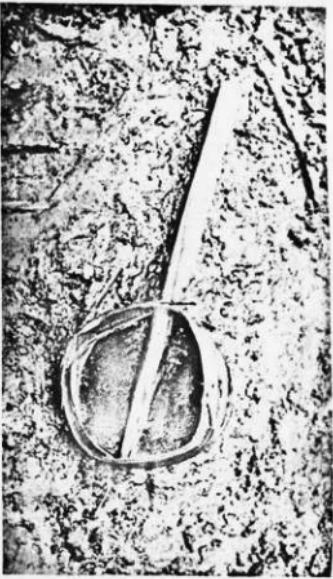


小谷地第二地区擴張区

図版 V



器 (H レンチ)



器 (I レンチ)

寄 66237